

Yong Officials' Camp 2015

参加報告書

北見地区バスケットボール協会

村中 怜美

1. 期日

平成 27 年 8 月 14 日 (金) ~ 16 日 (日)

2. 会場

埼玉県上尾運動公園体育館

3. 参加者

25 歳以下の日本公認審判員

男性 23 名 女性 17 名 計 40 名

4. 日程

8 月 14 日 (金)

12 : 30 受講者受付

13 : 30 開講式

13 : 50 実技 I

「よりよいプレゼンテーションの基本

体幹をつくるトレーニング

アジリティトレーニング」

野田 拓司 氏

18 : 00 夕食

19 : 00 講義 I 「STANDARD QUALITY」

Mr. Carl Jungebrand

21 : 30 入浴・就寝準備

23 : 00 消灯

8 月 15 日 (土)

6 : 30 起床

7 : 00 朝食

8 : 00 移動

9 : 00 実技 II 「高校生男女モデルゲーム」

17 : 00 更衣

18 : 00 夕食

19 : 00 講義 III 「YOC から世界へ」

加藤 誉樹 氏

19 : 20 講義 IV 「ルール・マニュアル」

平野 彰夫 氏

20 : 40 閉講式

21 : 00 入浴・就寝準備

23 : 00 消灯

8 月 16 日 (日)

6 : 30 起床

7 : 00 朝食

8 : 00 移動・実技準備

9 : 30 実技 III 「高校生男女モデルゲーム」

(各自帰りの交通機関にあわせて随時解散)

5. 講義参加報告

講義 I

講師 Mr. Carl Jungebrand

(FIBA Head of refereeing)

講義では「上手くいく、いかないは自分次第であり、上手くいかないときは自分自身を見つめ直すと原因が見える。審判と日常生活は繋がっているため、日常生活から確認することや姿勢を正すことを意識すると良い。目標が言える審判が大切で必要であるということ。夢に向かって努力をし、自分で具体的に目標を掲げている人は絶対にそのようになれる。」とお話をいただいた。

「良い審判になるためには何が必要か」検討した。

- ・常に謙虚な姿勢でゲームに取り組むこと
- ・全てのことをコントロールし、信頼関係を生み出すこと

これらのことを心の中にいれて取り組むことが1番大切である。

2 パーソンのメカニックでは、「Distance (play とある程度の距離を保つ)」「Stationary (その場に止まる)」が取り上げられた。

Distance(距離)

距離が近すぎると全てが速く見え、逆に距離が遠すぎるとプレイが遅く見える。なので、判定をするためにはある程度の距離を保つことが必要となる。

Stationary (止まる)

正しい位置に動き、静止し判定を下すことがベストである。視線はぶらさず、Open Angle 45度で見る。体の向きが重要となる。

- ・ 笛を吹くのは1回 (3Sを意識)

笛を加えたままではなく、吹いた後に喋りコミュニケーションをとること

- ・ シグナルは両手を使えるように

TOコールをする時リズムが必要

(全て2カウントのリズムで行う)

- ・ スローイン

スローインの位置を指し示す。

ボールを渡す前に笛を加え、Open Angleをとってコート上を確認する。

選手に当たらないように外側の手でカウントする。

また、審判には4つのことが求められる。

1. Speed(スピード)
2. Strength(強さ・体力)
3. Endurance(体を回復させる体制)
4. Flexible(ケガをしない柔軟性)

まず判定するためには、トレーニングが絶対に必要となる。このような身体をつくるために、レフリーは選手以上にトレーニングをしなければならぬ。

プレイには、始まり・中間・終わりがある。イリーガルなものを見つけるため、プレイを長くみることが大切となる。イメージを入れることによって予測ができるようになり、良いスペースで判定することができる。良い判定を積み重ねることによって信頼性が高まる。エリア外で判定をしてしまうと事実だったのか確認ができないので、自分のエリアのみしっかりと判定することが大事。周りから言われても自分で自信を持って正しいと言えるようにならなければいけない。

講義II「YOCから世界へ」

講師 加藤 誉樹 氏

加藤氏がステップアップをするために行った経験の講義内容であった。ABCを守ることによってステップアップができたようだ。

A：当たり前のことを

B：バカにしないで

C：ちゃんとやる

当たり前のこととはなにか検討し発表した。

- ・ 手をまっすぐ上げ時計を止める
 - ・ タイムインの合図をしっかりとる
 - ・ 姿勢を良く、見た目をきれいにする
- このようなことが挙げられた。

ライセンスが変わったからと言って基本を疎かにするのではなく、常に初心の気持ちで活動している。色んな人の助けや支えがあるため、審判活動が出来ている。今回のYOC参加者の中から国際審判員が出てほしいとお話をいただいた。

講義III「ルール・マニュアル」(DVD 講義)

講師 平野 彰夫 氏

本講義では、「Cylinder」「Legal Guarding Position」についてDVDの映像を見ながら、ル

ールブック・マニュアルで照らし合わせて確認をした。

一度 Legal Guarding Position をとり、そこから Cylinder はどうなのか考えるとファウルであるのか、ファウルではないのかが解かりやすい。見る位置や角度によってファウルに見えてしまうことがあるため、より良い位置で判定を下すことが大切である。

DVD では何度も再生を繰り返すことが可能だが、ゲーム中は一瞬で判断し判定しなければならない。触れ合いの責任はどちらにあるのかも重要である。

【総括】

2 日間にわたり、「自分は将来どのような審判員を目指すか。そのためには何をすべきか」を考え認識することができた。

また、映像を用いた講義を受け「Cylinder」の概念について更に理解することができた。普段、映像でゆっくり見て細かく確認をすることがなかった。映像を見ることによって、自分の中でプレイをイメージすることもできた。今後 1 日 1 つでもこのような映像を見て勉強していきたい。小さな課題を 1 つずつクリアし、レベルアップが必要となる。

6. 実技参加報告

実技Ⅰ「よりよいプレゼンテーションの基本－体幹をつくるトレーニング・アジリティトレーニング」

講師 野田 拓司氏

FIBA より審判員専用のトレーニングが提示され、ゲームを務めるにあたり必要な体力や動きについて実技を行った。スピードのあるゲームとなると 1 ゲーム 100 往復するため、審判員は

選手よりも走れなければいけない。そのため、日頃からのトレーニングが必要となる。

また、ただトレーニングをこなすだけではなく、見た目を重視としたトレーニングが必要となる。

実技は、以下のようなことを実施した。

- ① 体幹を意識しながら行うダイナミックストレッチ
- ② 人と話が出来ない程度のスピード（60～80%）でランニング
- ③ スピードダッシュ

（前傾や左右にぶれないように意識し、胸を張って、決められた場所より先までダッシュをする気持ちで走る。完全に回復をしてから走ること。）

ただ走るのではなく走り方が重要である。常に体幹を意識し、背筋を伸ばしながら上体を起こして走ること。

【総括】

今まで自分が行ってきたトレーニングは、体力をつけるためのトレーニングのみであった。野田氏のトレーニングで審判の見栄えの大切さを学んだ。ゲーム中だけではなく、日頃のトレーニングから見栄えを意識したトレーニングが必要と感じた。私は、姿勢が猫背であるため見栄えがとても悪い。見栄えの良い審判員になるために、日常生活から正しい姿勢を常に意識すること。今回実施したことを取り入れながら、毎週継続して筋力トレーニング・ランニングを実施したい。

実技Ⅱ「高校生男女のモデルゲームを使い実技講習」

10 名 1 グループの班を作り、各班に 4 名の講師がつき、ご指導いただいた。担当いただいた講師は、大野健男氏、安西郷史氏、堀内純氏、

平野彰夫氏であった。モデルゲームは 10 分・2 分・10 分であった。

(1) 第 1 試合 8 月 15 日 12:30～

入間向陽 — 小山台 (男子)

主任：平野 彰夫氏

主審：土門 亮太 (山形)

副審：村中 怜美

本ゲームは、講義で学んだ「Open Angle 45 度」を意識して臨んだ。45 度に角度をつけることによって、視野を広く抑えることができた。リードのときの体の向きでどこを見ているのか表現できるようになりたい。

トラヴェリングのヴァイオレイションが多く、パスを受け取るときのミートの仕方やドライブするときの突き出しで 2 ステップ以上となっていたが、判定することが出来なかった。自分の課題の 1 つとなるトラヴェリングのヴァイオレイション。ボールを受け取るときのプレイヤーの状況、足の状態 (床との関係)、ピヴォット・フットの決め方等瞬間的に判断することが必要である。

また、プレイヤーがショットを打つとき防御側プレイヤーとの触れ合いが多くみられた。触れ合いがあるからファウルではなく、防御側プレイヤーとボールをコントロールしているプレイヤーどちらが位置を占めているのか確認する必要があった。しかし、現象は見えていたが Cylinder を侵していたのか確認できず取り上げることが出来なかった。

講 評

〔平野氏〕トラヴェリングのヴァイオレイションについてお話をいただいた。どこで保持をしたのか、ピヴォット・フットはどちらか、ボールが手から先に離れたのか、ピヴォット・フットが先に離れたのか。このようなことの確認が足りないため、判定が出来なかったと感じた。

トレイルの見方は良いので、このまま継続していくと良い。

〔平原氏 (小山台)〕センタープレイヤーがショットしたときの触れ合いについてお話をいただいた。Cylinder を侵していてファウルだったものがあつたのではないかと。どちらが位置を占めているのか見極めることが必要と感じた。

(2) 第 2 試合 8 月 15 日 16:15～

ふじみ野 — 草加 (女子)

主任：安西 郷史氏

主審：平田 悠 (和歌山)

副審：村中 怜美

本ゲームは、前のゲームを観戦し両チームがどのようなチームなのか理解したうえコートに立つことができた。両チームとも防御側プレイヤーが手を使うことが多く、どの基準で判定を下すかコミュニケーションを取りながらゲームを進めることができた。しかし、長くプレイを見すぎてしまい影響が出ているにもかかわらずファウルを取り上げることが出来ないことがあつた。触れ合いの事実があり、責任は防御側プレイヤーにあるのかボールをコントロールしているプレイヤーにあるのか確認し、ファウルを早い段階で取り上げることが必要と感じた。その点、相手審判員は早い段階でファウルを取り上げており、取り上げ続けることによって選手は手を使わなくなった。

講 評

自分の目の前から始まるプレイに対して、スペースへ Penetrate ではなく、サイドラインと平行にダウンしてしまうことがある。これは自分の癖になりつつあるので、早めに改善をしなければならない。始めからプレイを見ることによって、スペースに対して Penetrate することが出来る。また、リードで右に行くときはどのよ

うなときかもっと理解が必要である。ボール中心になることによって、行かなくても良いときに右へ行くことが多かった。右へ行きブラインドになるケースもあり、どこにスペースが生まれるか研究が必要と感じた。形で動くのではなく、判定をするためにスペースへ動くことを考え絶えず良い位置を探し求めなければならない。

(3) 第3試合 8月16日 13:15~

伊奈学園 一 都立駒場 (男子)

主任：平野 彰夫氏

主審：中山 拓哉 (千葉)

副審：村中 怜美

本ゲームでは、オフボールの触れ合いが問題点となった。パス・ランをするときにコースへ入ってバンプをするのではなく、手を使って選手を止めるプレイが多かった。何点かは取り上げることが出来たが、一貫して全て取り上げることが出来なかったのが反省点である。

自分が1つのプレイを長く見たため、相手審判員と同じプレイを見てしまうことが多々あった。これは、プレイの引き渡しの仕方が悪く2人で10人のプレイヤーを視野にいれていないことになる。もっと相手審判員の位置や目線を確認して動くことを意識していかなければいけない。

また、ゾーンディフェンスに対して対応がすぐにできなかった。カンファレンスでゾーンディフェンスの対応の話をしなかったため、エリアの分担に戸惑ってしまった。

講評

ゾーンディフェンスの見方は、基本的には縦に分割して見るようにし、3番エリアはリードから見ることが難しいのでトレイルが責任を持って判定するとご指導いただいた。

ゲーム内容としてはとても良く、お互いの判定基準が一致していた。今後もぶれがない判定基準を確立してほしい。

【総括】

実技講義では、「判定基準の確立」「見栄え」を課題とし取り組んだ。2日間で3ゲーム吹かせていただいた中でやはり自分の判定基準が曖昧になる時間帯があった。曖昧になる原因は、集中力と精神面の問題である。40分間の集中力と何を言われても自分が正しいと言えることが必要である。ルールブック・マニュアルを今以上に理解し、自信をつけることによって判定基準の確立に繋がると感じた。判定基準を確立し今後に繋がる良い土台をつくり上げていきたい。また、この3日間を通して1番意識をしていたのが見栄え。審判員は常に見られている。YOCに参加し、見栄えの重要性を改めて感じた。日常生活から姿勢を正すことを意識し猫背を直していきたいと思う。

7. YOC 総括

自分の課題がもっと明確になり、細かい課題を1つずつクリアし身につけることが大事であると実感した。プレイの見方や体の向きで見ている位置を示せるということも学んだ。リードの見方やリバウンドの見るべきところに悩みつつありましたが、多くの講師の方々にご指導いただき解決することができた。この3日間で学んだこと、経験したことを自分の今後の活動に生かし、より良い審判員になるために努力していこうと思う。YOCでは、全国で頑張っている同世代の審判員と交流ができ、モチベーションも高まりとても良い刺激となった。

8. 謝辞

全国YOCにあたり、ご支援下さいました北海道バスケットボール協会の皆様をはじめ、北見地区バスケットボール協会の皆様、この度はとても貴重な経験をさせていただき心より感謝申

申し上げます。今後、この経験を活動する中で生かすのはもちろんですが、北海道や北見地区で貢献できるよう日々成長し前進していきたいと思っております。また、3日間お世話になりました総務の皆様、多くの講師の皆様に深く感謝申し上げます。

以上